

学区探訪

郷土探訪より
二十一号

二・四

矢作川の恩恵

今日では、矢作川の河床も下がり水量も少なくなりました。それに堤防もしっかりしているのです、大門学区もかつてのように水害の心配をしなくてもよくなりました。しかし、学区のお年寄に話を聞いてみますと、昔の矢作川は現在とはずいぶん異なっていたようです。

昔、矢作川の河床は今よりもずいぶん上であり、水量も豊富でした。まさに人家の

上を流れる天井川だったのです。そのため井戸を掘っても水をくみ上げるポンプの必要がありませんでした。穴を掘ればかつてに水がふき出てくるのです。どんどん湧き出てくる冷たくきれいな水は、排水路へ流れ、さらに農業用水となって田へ流れこんでいました。また、田の中にも水の湧き出てくる穴があり、人々はそれを『おもぐり』と呼んでいました。牛に田をおこさせていると、牛がその穴に足をとられることもあったそうです。大門学区の農業は矢作川のおかげで水不足がありませんでした。

学区探訪

郷土探訪より
二十二号

二・五

続・矢作川の恩恵

昔から大門学区の農業は、矢作川のおかげで用水の心配をする必要はなく、むしろ排水の方を心配しなくてはなりませんでした。田んぼが水につかってしまうので、作業をするのに田舟が必要でした。今、郷土室にも寄贈された田舟が展示されています。矢作川から湧き出てくる水のため、学区には三つの大きな池がありました。一つは上里一丁目・一つは堤下公園・そしてもう

一つは水郷公園のところにありました。この水をどんどんふき出す池からは、川も流れ出ていました。水郷公園から流れ出た川と堤下公園から流れ出た川は大樹寺のあたりで合流していたそうです。

大門学区がいかに水が豊富にあったかは地名からもうかがい知ることができます。旧字を調べてみると「池田」・「池端」などの地名を見つけることができます。上里一丁目のあたりを旧字で「池端」といいますが、地名からもこのあたりが池に臨んでいたということがわかります。

学区探訪

郷土室だより
二十三年の
二十三号

二・六

矢作川の水害

矢作川は水量が多く河床も高かったので当然豪雨・台風の時には水害の恐怖がありました。しかも、当時は今のようには堤防がしっかりしていなかったのです。風が吹くと水が勢いよくふき上げてきます。人々は村の老人の指図によって危い所へ杭を打ちに行きました。老人たちは、潮の干満などから危険な時間、危険な場所をよく知っていて若い人に指図をするのです。水と戦い

ながら生活するうちに、そのような知識を身につけたのでしよう。いざという時のために用意した船をつないだ木など、最近まで残っていたそうです。このように恐ろしかった矢作川も現在は河床が下がり、水量も減少したので昔のような水害の心配はなくなりました。しかし逆に水が湧き出てこなくなつたのでポンプで水をくみ出さなくてはならなくなりました。そこで農業用水を得るために、大門の上・中・下・新田と大樹寺で協力して水郷公園のところに井戸を掘って水をくんでいます。

学区探訪

郷土室だより
二十三年の
二十四号

二・七

学区の農業

太平洋戦争まで学区には桑畑がたくさん見られました。つまり養蚕がさかんだったのです。また昭和に入ってからそ菜栽培が著しく発達し、昭和七年には大門出荷組合も設立されています。

学区の農業は農協ができてから、大きく変化しました。ビニルハウスによる施設野菜の栽培が盛んになりました。ハウスでは指定産地となっているためナスが中心に作

られています。また畑にもトンネルをかけて早出しの野菜が出されています。

米作りも機械化が進んで楽になり、兼業農家が増えました。昔の専業農家は自作自給的な生活なので、いろいろなものを作っていました。今は農業も専門化したためいろいろなものを作らなくなったそうです。昔の農家は夜になると縄をなったり、むしろを織ったりしましたが、今はそれもやらなくなりました。昨年文明展で学区の農具を郷土室に集めました。明日の学芸会先生たちの職員劇でそれらを紹介します。

学区探訪

郷土探訪
二十五号

二・十

矢作川の流れ

矢作川はしばしば氾濫し、そのために土砂が沈積して、流域に氾濫原性の沖積平野ができました。この沖積平野の中州に発達した一部落が大門であると考えられます。この中州で大門の人々は稲作をして生活をしてきたのでしよう。

この矢作川沖積平野は、自然堤防と後背湿地が入り組んでおり、このことから矢作川は何度かその流路を変え、しかも網目状

に流れていたと考えられています。五本も六本も川が流れ、その間に中州が発達していたのでしよう。そして、現在大門は矢作川の東岸にあります。昔は西岸にあったのではないかと考えられます。大門という村名の由来は、北野の薬師寺（今の北野廃寺）の山門があったからだと言われますが、北野に薬師寺があり山門だけ川の向う岸に造るといふのは不自然です。ですから、北野薬師寺の山門があった大門も北野と同じく矢作川の西岸にあったが矢作川の流路が変わったため現在のようになったのでしよう

学区探訪

郷土探訪
二十六号

二・十二

矢作川

前号に書きましたように昔、矢作川は大門より東を流れてたのではないかと考えられます。上大門にある八剣神社の氏子が矢作川をはさんで両岸にあることからそれがいえると思います。すなわち、八剣神社の氏子は大門・上里・国江・榭塚にあるのです。

矢作川の上流の三河山地は風化の進んだ花こう岩が多く、そのためマサ土の流出が

激しかったのです。それで矢作川の河床は年々高くなり天井川となったのです。しかし上流に次々とダムができたため土砂の流出が少なくなり、しかも河砂の採取が続いたため現在は河床が低くなりました。河床が高かったころ、堤防から水がもれて出ていたといえます。これは、風化花こう岩の砂粒が水を浸透させやすかったからでしょう。河床が高く水量も豊富だったころ、伏流水による川が流れていました。堤防から冷たくきれいな水がふき出していたそうです。

学区探訪

二・十三
郷土資料より
二十七号

伏流水と排水

昔、学区には矢作川の伏流水による川が流れていました。大円寺の北からふき出た水は、上大門の部落にそって北へ流れ、今の水郷公園のところにあつた大門池へ流れこんでいました。この川は矢作川と逆に北へ流れていたもので、さかさ川と呼ばれていました。さらに大門池から流れ出た川は農業用水となって南へ流れ、上里から流れてきた川と共に早川に合流していました。

昔の学区は水が多すぎて困りました。田んぼが湿田になってしまふので排水に苦勞したのです。

新左・権左の水争いの話が伝えられています。中大門と下大門の境あたりで、新左と権左という二人の農民が水争いからけんかをし、鍬と鎌で殺し合いをしました。そのため、雨が降るとこのあたりに青い火の玉が出るようになったといふのです。普通水争いといえば水を自分の田へ引く争いですが、この新左・権左の水争いは排水のため水争いだったと伝えられています。

学区探訪

二・十四
郷土資料より
二十八号

大門遺跡

上大門にある八剣神社の裏、矢作川に接つた自然堤防にあります。昭和三十二年、ここを流れる水路の拡幅工事が行われた時、土器や瓦が発見されました。土器類には弥生時代後期の土器、平安時代末から室町時代にいたる碗・皿などがありました。瓦には白鳳時代や鎌倉時代の瓦がありました。この大門遺跡の発掘により、弥生時代つまり今から約二千年前から、この大門の

地には人間が住んでいたことがわかりました。また、大門遺跡から出土した白鳳時代の瓦は、対岸の北野麿寺跡出土の瓦と類似しており、北野薬師寺との関連が考えられます。これらのことから、大門は弥生時代から人が住み、古墳時代をへて白鳳時代には寺院の建立と交通の要衝とによって繁栄したと考えられます。上大門には八剣神社や三鹿の渡しの伝説もあり、歴史豊かな土地であることがわかります。大門遺跡の出土品は、現在、市の郷土館に保存されています。

学区探訪

二・十六
郷土探訪
二十九号

味噌粕岩遺跡

国道二四八号線を北上、間もなく青木橋への坂道にさしかかろうとする手前、道路の左側にココリコという喫茶店があり、それに並んで小さな朱ぬりのほこらが建っています。このあたりが味噌粕岩遺跡のあったところですが、現在では景観もすっかり変わってしまいました。ここは、今、上里二丁目ですが、区画整理以前は井ノ口町字深田といい、矢作川の作った沖積地の自然堤

防で、岩石が露頭していました。明治の中ごろまで石材の採取場であったそうです。その露頭する岩石を遠くからながめると味噌粕に見えたのでしよう。味噌粕岩にまつわる長者伝説については次号に書きます。この味噌粕岩遺跡は昭和三十四年と四十年と二回にわたって発掘調査が行われました。その結果、弥生時代中期初頭の土器片が見つかり、この地方で最初の農耕文化がここに根をおろしたことがわかりました。出土品は市の郷土館にあり、調査報告も出されています。

学区探訪

二・十七
郷土探訪
三十号

味噌粕岩の

長者伝説

昔、あさひ長者という人がいました。この長者は、大門に大なる門を有し、蔵前に蔵を置き、井ノ口に井戸をもっていました。ある日長者が外出すると、子どもが白いへびをつかまえていじめているのに出合いました。長者はかわいそうに思い、この白へびをもらって逃してやりました。すると翌夜、白へびが長者の枕元にあらわれ、命を

助けてもらったお礼をいい、一匹の小さな犬を残していきました。そこで長者がこの犬に一合の米を与えると、純金一合を排せつしました。二合与えると、やはりその割合で排せつをします。これによって長者は巨万の富を得ました。そして長者は非常に長生きをし、四百歳になっても死ぬことができず。ついに真福寺の池に身を投げて死にました。このあさひ長者が、たくさんいた一族従者に食べさせるためにつくった味噌汁の粕が堆積して巨岩になったのが味噌粕岩だといわれています。